

お騒がせマリッジ2

もくじ

お騒がせマリッジ2 5

番外編
宝条瑛知のご機嫌なバレンタインデー 251

お騒がせマリッジ2

戦闘準備 変態社長夫と意地っ張り妻

男なんて、大大大大大ーっ嫌い。
私は恋愛なんて絶対しない！

浮気を繰り返す父、そしてその浮気を嘆きながらも父に依存して、悲劇のヒロインを気取り、離婚しようとする母。女癖が悪い兄に、旦那に浮気をされて悩む従妹——そんな女癖が悪い男と男運のない女を身内に持つ私、白崎夏奈は、「男なんて最低っ！ 大っ嫌い！ 恋愛なんて絶対しないっ！ 一生一人で生きていく！」と、決めていたのだけ……

実家の会社が経営難で潰れそうになったのを機に、私の運命の歯車は狂いだした。

「夏奈さん、実はお願いがあるのですが」

「何？ 変態的なお願いだったら、ぶっ飛ばすけど」

「違いますよ。実はシューズボックスの仕切りがもう二段ほど欲しいのですが……昼食を終えたら作って頂けませんか？」

「あ、なんだ。うん、わかった。ちょうど同じような色の板が余ってるから、ちゃっちょと作っちゃうね。あの作りだとブーツとかしまいにくいと思ってたし、ちょっとアレンジしても構わない？」

「ありがとうございます。ええ、構いませんよ。じゃあ、俺は作業後にちょうど食べられるよう、お菓子を作っておきますね」

「わあいつ！ ありがとうっ！ パンケーキがいいなっ！ 生クリームでんこもりのやつっ！」

「了解しました」
彼の名は、宝条瑛知——

シャープな印象を与える細いフレームのメガネ、切れ長の瞳、高くスツとした鼻梁、形のいい唇、日本人離れした高身長とスタイル……と整いすぎた容姿を持ち、百年以上続く製薬会社、宝条グループの次男で、現社長。彼との出会いはとんでもなく奇妙なものだった。私の父が親会社である宝条グループに資金援助を頼んだのだけ……

その代わりにとんでもない条件をふっかけてきたのだ。

それは瑛知さんとの、ある条件での結婚——

父に土下座で頼まれ、家族を見捨てることができなかつた私は、彼と「完全別居の契約結婚」をすることになったのだ。

この男、素晴らしいスベックを持っているにもかかわらず、少々？ いや、かなり変わった男で——
「では、変態的なお願いは後ほど……ということだ」

「変態的な願い事もあんの!? ……トンカチで殴られてもいいなら、聞いてあげてもいいけど？」
「それもまたいいですね。新たな扉が開けるかもしれないません」

「開いてたまるか。一生開けないように、釘で打ち付けるからっ！ ひたすら打ち付けるからねっ！」

「釘……なんだか卑猥な響きで……」

「どこがっ!? 少しも卑猥じゃないでしょ!？」

——と、このようにそれらを全て台無しにしている残念な変態男だ。

男なんて大嫌いだけど、一切の接触がないのならいいか、と思って結婚したものの、結婚前に前社長である宝条家長男とその妻が失踪したことによって、条件がガラリと変わってしまった。

前社長が辞職したことにより、次男である瑛知さんが社長に就任。前社長と妻の間には子供がない。そのため跡継ぎが必要。

——つまり、次男の妻である私が跡継ぎを産まないといけなくなったわけで……

断れる立場になかった私は、泣く泣く瑛知さんと一緒に暮らすことになったのだった。

初めはこの男が大嫌いで、瑛知さんも私のことを好ましいとは思っていなかったはずだったのだけれど——なぜか好かれるようになって、私も一緒に暮らす上で彼のセクハラ行為……じゃなかった、優しさに触れ、惹かれて、今では両想いになって本当の意味で夫婦となった。

「でも、お菓子なんて作って大丈夫? 昨日も仕事で、寝るの遅かったんでしょ? 今日はせっかくの休日なんだし、少しゆっくりして休んだ方がいいんじゃない?」

突如役員から、社長に就任した瑛知さん。

実は彼の夢は、宝条グループの社長になることだったらしい。

次男だからと早々に諦めて、役員として会社の発展に尽くそうとしていた瑛知さんだったが、お兄さんの失踪で夢を叶えることができた。

高熱を出したときも会社に行こうとし、残業が続いて睡眠不足が続いているときも、家に仕事を持ち帰ってきたときも、けして辛そうな顔は見せない。むしろイキイキとしていて楽しそうだ。

瑛知さんを支えたい……

彼を好きになってからは、自然とそう思うようになった。

恋愛をするなんて……男を好きになるなんて、ずっと馬鹿らしいと思っていた。でも、今は違う。瑛知さんを好きになれて、幸せだ。

「……今日もしてくれているんですね」

「え?」

「ネックレス、です」

瑛知さんはニッコリ微笑み、自分の首元を指先でトントンと叩く。

「あ、……えーっと……まあねっ! 欲しかったやつ、だし? 貰ったばかりだし……ねっ!」
これは私の誕生日に、瑛知さんがプレゼントしてくれたネックレスだ。

私が欲しがっていたのを覚えていたらしく、サプライズでプレゼントされた私は不覚にも泣いてしまった。

……瑛知さんにはあんな言い方をしたけれど、実は私の宝物。

小粒のパールとダイヤモンドがあしらわれた、ピンクゴールドのハートモチーフのネックレス。どんな服装にも合わせやすいからいつもつけている。……コーディネートに合わないときも、実はお守りとして小さなアクセサリーケースに入れて持ち歩いているのだ。

これを身に着けていると、なーんか胸の中が温かくなるんだよね……

ふとした瞬間にネックレスに触れると、瑛知さんと結婚して幸せって気持ちを思い出して、自然と口元が綻ぶのだ。

「俺が贈ったネックレスが、夏奈さんの首筋に触れ続ける……なんだか俺自身がいつも夏奈さんの首筋に吸い付いているみたいで、気分がいいですね」

「怖っ！ ていうか気持ち悪いから、そういうこと言うのやめてよっ！ ド変態っ！」

……しばらくは、見るたびに呪いのアイテムのように見えてしまいそう……

「では、俺はお菓子作りに取り掛かりますね」

「うん、私もさっそく作業に入るね」

若干、男女の役目が逆な気がするし、普通の夫婦とはどこか違うかもしれないけれど、幸せな毎日を送っています。

第一戦 除夜の鐘すら敵わない。

一月一日――

新年、あけましておめでとうございます！

本日、私は、瑛知さんと結婚してから初めてのお正月を迎えました。

「美味しいー……っ！」

ダイニングテーブルの上には手作りのお餅を使ったお雑煮を始め、瑛知さんが腕によりをかけた豪華なおせち料理が並んでいる。

ああ、なんて素敵なお景っ！ それに見ただけじゃなくて味も最高！

上品な出汁が利いたお雑煮は文句なしだし、和洋折衷のおせちは一品一品こだわっていて、お腹いっぱいなのに箸が止まらない。

「相変わらずよく食べて頂けるので、作り甲斐があります。雑煮のおかわりもありますよ」

「おかわり欲しいっ！ お餅、もう一個食べたい！」

おかわりを貰うべく器を空にしようと、残り少ない汁とお餅を口に運ぶ。

「喉に詰まらせないよう注意してくださいね。……詰まらせたら問答無用で吸い取りますから、覚悟してくださいね」

ちょうど呑み込んだお餅もちが大きめだったから、一瞬ドキッとする。

「き、気を付けるよ。新年早々、口の中に掃除機突っ込まれて吸引されるとか、絶対やだし……」

「掃除機？ そんな雑菌だらけの不潔なものを夏奈さんの口の中に入れるわけじゃないじゃないですか。俺がキスして、全身全霊を込めて吸い出します」

爽やかな笑顔で某掃除機メーカーにも負けない吸引力を發揮はつしますと言われ、背筋に氷を落とされたみたいにゾクゾクする。

こ、この変態ならやりかねない！

「ぜ、絶対やだっ！ 雑菌だらけの掃除機に吸い出された方が、数百万倍マシだから！ ていうか頼むからそっちにして！ 絶対掃除機にしてっ！」

「そう言われると、意地でも口で吸いたくなりますね。……ああ、そうです。いざというときのために、予行練習でもしておきますか？」

『ああ、そうです……じゃないからっ！ し・な・いつ！ とうか詰まらせないしっ！ 練習なんてする必要ナシ！』

慎重に食べ進める私を見ながら、瑛知さんはニヤリと笑う。

「み、見ないでよっ！ 詰まらせないって言ってるんでしょっ！」

「俺は、純粹な気持ちで美味しそうに食べている夏奈さんは可愛らしいなあと思って、見ているだけで……」

「純粹な気持ちを持った人間が、そんな顔で見えてくるかっ！」

ああ、新しい年を迎えても、瑛知さんの性格にはブレがない……

ちよつとはブレてくれたらいいのにと思いながら、私はもっちもっちと絶妙な焼き加減のお餅もちを咀嚼そじやくする。

二人で迎える初めてのお正月――

結婚した女友達は、年末年始は夫の実家で過ごすと言っていた子が多かったから、てっきり私もそうしなきゃいけないのかなって思っていた。

義実家で過ごす年末年始……粗相そそうのないようにしなくちゃ。ああ、緊張する！ なんてかなりドキキしていたのだけど、瑛知さんときたら、初めから全くその気はなかったようで……

『え、年末年始を実家で？ 嫌ですよ。親戚も集まってくるでしょうし、激しく面倒です。挨拶もいりません。……夏奈さん、そんなに俺の実家がいいのですか？ 変わっていますね』

『違う、違う、違うっ！ 普通結婚したら、お正月は夫の実家へ挨拶に行ったりするでしょ？』

『ああ、なるほど。そういうことですか』

挨拶ぐらいいはさすがにした方がいいんじゃないかと食い下がったものの、全くその必要はないと詳しく聞けば、瑛知さんは以前、『たまには年末年始を一緒に過ごそう。それが駄目なら挨拶くらいに顔を出しなさい』と両親からお説教を受け、マイペースに過ごさせてくれるなら滞在してもいいと、渋々数日間を実家で過ごしたことがあったらしい。

四日間の滞在を予定していたけれど、一日過ぎたところで『お願いだから帰ってくれ。誘ってす

まなかった。これからはお前の好きにしなさい』と言われ、以降は誘われなくなったそうだ。

一体何したの……!? と尋ねたところ、瑛知さんはとびきり爽やかな笑顔で、ただマイペースに過ごただけだとしか答えなかった。

ああ、なんて恐ろしいの！ 一体どうマイペースに過ごしたら、そんなセリフを言われることになるわけ!? お義父さん、お義母さん、お疲れ様です……!

それよりも私の実家に挨拶へ行きたいと言われたけれど、今年、うちの家族は年末年始はハワイで過ごすと思っていたから、いらないと断った。

まあ、そうでなくても、何か適当な理由をつけて断ったと思う。いつも忙しい瑛知さんと二人きりでのんびり過ごせる機会を無駄にしたいくないし、うちの両親も挨拶なんてこだわる人たちじゃないから、瑛知さんに文句を言う心配もないしね。

慎重にお餅を呑み込んでおかわりを要求すると、瑛知さんは背もたれにかけてあったリボンやフリルがたっぷりついた乙女チックなエプロンを身に着け、さっとお腕を回収してくれた。

「こ、今年もまたそのエプロンなの?」

「ええ、新年だからって、新調するつもりはありませんよ」

「ああ、そう……まあ、どっちでもいいけど」

「このエプロンはポケットがたくさん付いていて、機能性に優れていますからね。くたびれるまで使っつもりです」

瑛知さんが愛用しているこの乙女チックなフリルエプロンは、会社の飲み会で行われたビンゴ

大会でゲットしたものらしい。捨てるのはエコじゃないから、という理由で使っていると教えてもらったけれど……やっぱりに気に入っているんじゃないかと思う。

しかもゲットしたのは一枚じゃなくて七枚だったみたいで、一週間毎日違うものを身に着けている。一緒に暮らしているうちに、だんだん法則がわかってしまった。

月曜はピンクのドット柄、火曜は前当てとポケットがハート型のもの、水曜は薔薇柄、木曜は水色のストライプ柄、金曜は赤のチェック柄、土曜はスイーツ柄、日曜は苺柄……と、曜日によって使い分けているようだった。

「そんな熱い視線で見つめられると、少々照れてしまいますね。どうかしましたか?」

「や、なんでもない」

もし本人にエプロンの法則について確認したら『興味を持って頂けて嬉しいですよ。エプロンだけでなく、俺のことを事細かに教えて差し上げます。さあ、すぐに俺の部屋へ行きましょう』なんて言っつて、とんでもない流れになりそう。ここは自重するに限る。

でも、絶対そう! だってここしばらくの間、その日の柄をメモしておいたからね! 間違いないよ!

……つて、なんか私、怖っ! ストーカーっぽい! 傍から見たら、私も充分変な奴だわ!

「ああ、雑煮の餅は太るから一個にしておこうと思っつたけれど、二個食べたくなったとかでしようか? いいですよ。二個焼いてきましょう」

「違うよ! ……ていうか、私すぐ肉付きちゃうタイプだから、一個でも危険なんだけども!」

ただでさえ、正月休みに入ってから食べまくっているしね。正直、ウエストがちよつときついよ
うな……

「すぐにカロリーを消費すれば、問題ありません。俺も夏奈さんのカロリー消費をお手伝いしま
すよ」

「腹筋を手伝ってくれるとか？」

一人だとやりにくいから、足を押さえてくれたらありがたいかも。

「いえ、もつと楽しくカロリー消費しましょう」

妙に爽やかな笑顔で言われて、嫌な予感で胸がいつぱいになる。

「……えーつと、一応聞くけど……何？」

「それはもちろん、セック……」

「やっぱり言わなくていい！ ド変態！」

聞かなぎやよかつたー！

すかさず遮つて罵ると、瑛知さんは口元を綻ばせる。

ま、また、嬉しそうな顔してるーっ！

いつもそうなのだ。私が罵ると、瑛知さんは怒るところか、嬉しそうな表情を見せる。

へ、変な奴……本当、変な奴……

二杯目のお雑煮を頬張っていると、瑛知さんが箸を止めてジッとこちらを見ている。

「何ジロジロ見てんの？」

また変なことを考えているんじゃないかと身構えていたら、瑛知さんは頬を緩めて笑う。

「いえ、今まで生きてきた中で、今年の正月が一番楽しいなあと思ひまして」

「……っ！」

ふ、不意打ち……っ！

心臓が大きく跳ね上がって、箸を落としそうになる。頬がポポポツと熱くなって、思わず手で煽
ぎたくなった。

……ちよつと悔しいけど、好きなんだよね、やっぱり。

「夏奈さんは、今までの正月の中で俺との正月は何番目に楽しいですか？」

「ええ？ 何その質問」

「何番目か知りたいんです」

瑛知さんの表情はいつものちよつと変態的なものではなかった。

あれ、もしかして真剣？

「えーつと……」

今までのお正月を思い出してみる。

浮気性の父もさすがに正月ばかりは自重し、兄もお目当ての女の子たちが実家に帰っていると
なるとか言つて、お正月だけはなんだかんだで家族一緒に過ごしていた。

去年は悪酔いした兄が私の高校時代の制服を着て踊り出したものだから、家族全員、お腹がよじ
れるほど笑つたんだっけ。

うん、楽しかった。楽しかった……けど……
じゃあ、一昨年……もつと前は？

遡さかのぼっていくと、ちよつと胸が痛くなる。家族の中でお正月ぐらいは楽しく過ごしたいという暗黙の了解があつたから、実家で過ごすお正月は確かに楽しかった。

……楽しかったけれど、私はどこか冷めていた。

だってあの楽しさは作り物だ。お正月が終わつたら両親はまた不仲に戻り、家の中の雰囲気は暗くなるってわかつてた。

本当は仲が悪いくせに、お正月だからって仲良し家族ごっこ？ 馬鹿みたい。……なんて、口には出さないけれど、いつの間にかそんなことを考えるようになって、純粹に楽しめなくなっていた。

——でも、今日みたいな日だったら、お正月だけじゃなくて、毎日続いてほしいなんて思う自分が一番馬鹿みたい。

「もしかして、ビリですか？ まあ、それはそれで燃えますね。いつか必ずナンバーワンに君臨くんりんしてみせますよ」

「えっ！ 違う、違う！」

私としたことが、柄がらにもなくセンチメンタルな気分になっちゃつてたよ。

「楽しいっていうか……なんていうか……」

「楽しくないというか、つまらないですか？」

「ううん、そうじゃなくて……」

瑛知さんと過ごすお正月は、作り物なんかじゃない。

だから今日が終わつても、明日も明後日もずっと、こうしてられる。それはなんて……なんて幸せなことなんだろう。

胸の真ん中が、ポカポカ温かい。

「楽しいっていうか、それ以上っていうか……幸せ、なんだよね。今まで過ごしてきたお正月の中で、一番幸せ……」

予想外の答えだったのか、瑛知さんの切れ長の目がまん丸くなる。

ひいひい……！ は、恥ずかしい。なんか、すごく恥ずかしくなってきた！

「夏奈さ……」

「そ、それよりもっ！ 午後から初詣はつもとでに行かないっ!? せっかくだしっ！ お正月だしっ！ ね!?」
恥ずかしさのあまり瑛知さんの言葉を遮さへぎり、ペラペラ話す。

「初詣……いいですね。是非、行きましょう」

「しっかり温かくしていかないとねーっ！」

「そうですね。急に恥ずかしくなってきたら、マシンガントークをすることで誤魔化ごまかしている可愛い夏奈さんが風邪を引いてしまつては大変ですから」

「……っ……わ、わかつてるなら、言わないでよっ！ 知らないふりしてよ！」

瑛知さんはなぜかこのタイミングでスマホを取り出し、操作する。

「何してんの？」

「先ほどのセリフをもう一度言っただけですか？」

「な、何する気？」

瑛知さんはニッコリ笑うと、なぜか私の方にスマホを向ける。

「ちょ、ちょっと、何？ 何してんの？」

「動画に収めさせて頂こうかと。あ、先ほどのように微笑みながらお願いします」

「で、できるかーっ！ ちょっと……カメラこっちに向けないでっ！」

顔の前で腕を振って、必死に撮影を妨害した。

「では、せめて音声だけでも頂けますか？ ちょうどボイスレコーダーアプリをダウンロードしたんです」

「音声だけだからっていいわけじゃないでしょっ！ ……って、なんでそんなアプリをダウンロードしてんのっ!？」

「色々使えそうだと思って、先日ダウンロードしました」
すっごくいい笑顔でサラッと言われた。

色々使えそうって何っ!? 仕事で!? ……仕事だよねっ!? そうだと言って!

「ああ、ちなみに仕事では使いませんか？ 夏奈さんと色々楽しめるかなあと思っています」

思考を読まれたのか、瑛知さんはすかさず付け加えた。

エ、エスパー!? おまわりさんっ! 変態エスパーがここにいます!

「色々って何っ! あ、言わないでっ! 怖いからっ!」

「そうですか？ 残念です。事細かにご説明したかったのですが……」

こ、怖いいいいいいい! 一体どんな変態的なことを説明する気だったの!?

「……ということ、準備が整いました。いつでもどうぞ」

「ということ、じゃないっ! だから嫌だっ! 言っただけでしょ! い、言っておきますけどっ!

私、絶対ボイスレコーダーを使うような変態的なこと、絶対、絶対、絶——っ対しないからねっ!」

そう宣言すると、瑛知さんが切れ長の瞳を丸くする。

え、あれ? 何、この表情。

「変態的なこと……夏奈さんは俺が変態的なことに使用するために、ボイスレコーダーをダウンロードしたと思っただけですか？」

「えっ?」

違うの!?

「驚きました。夏奈さんがそんな口に出しては言えないようなことを想像されていたとは……」

瑛知さんが眉を顰め、私をジッと見つめてくる。

「えっ……? あ……っ」

えっ、普通に日々の楽しい思い出を、音声として残しておこう的な意味だったの!?

「常識人の夏奈さんが、まさかそのようなことを想像されているとは……本当に驚きました。正直、ショックです」

う、嘘でしょ!? 瑛知さんがそんな微笑ましいことを考えるなんて、ありえないっ! でも瑛知

さんだって変態だけど、人間だもの。気まぐれを起こして普通のことを考えても、おかしくないか。

……って、これじゃ変態なのは、私の方じゃない！ は、恥ずかしい……っ！

オタオタとうろたえていると、瑛知さんはなぜかクスクス笑い出す。

「まあ、いい意味でのショックですけどね」

「……は？」

「大正解ですよ。さすが夏奈さん、俺のことはなんでもわかってくださっているのですね」

「えっ！ じゃあ、今の反応はなんだったの!? 明らかに『俺は変態的なことなんて微塵も考えてません』とか言いたげな感じだったじゃないっ！」

「ちよっと常識人っぽくふるまっただけです。夏奈さんが得意としている芸人顔負けの反応が見たかったので」

な、何それ……っ！

絶句していると、瑛知さんが今撮ったらしい音声再生させる。

『い、言っておきますけどっ！ 私、絶対ボイスレコーダーを使うような変態的なこと、絶対、絶対、絶対、絶対……っ！再生しないでよっ！』

『い、言っておきますけどっ！ 私、絶対ボイスレコーダーを使うような変態的なこと、絶対、絶対、絶対、絶対……っ！再生しないでよっ！』

「だから再生すんなって言ってるでしょ!? 早く消してよっ！ トンカチで殴られたいのっ!」

瑛知さんは何度も再生して、満足そうに頷く。

「よく録れています。無料のアプリといえども、なかなかあなどれませんね」

「早く消してって言ってるでしょっ!」

そう訴えても瑛知さんは全く構うことなく、何度も再生する。

「さて、この音声は今日から目覚ましに使わせてもらいましょう。思いがけない収穫があつて嬉しいです。新年早々縁起がいいですね。今年はいいい年になりそうです」

「め、目覚ましっ!? ちよっ……消してっ! 消しなさいよっ!」

「夏奈さんボイスのおかげで、明日から素晴らしい目覚めになりそうですよ。ああ、でも俺は目覚ましを鳴る前に起きてしまいますから、起きて聞くことになりませんが」

「それ目覚ましの意味ないでしょ! いいから消してよっ!」

「いくら俺の可愛い夏奈さんの願いでも、それだけは聞いて差し上げられませんね」

は、腹立つ……っ!

「可愛い可愛い奥さんが、消してって頼んでるでしょーがっ!」

席を立てスマホを取り上げようとすると、瑛知さんも立ち上がって手を上げる。百五十九センチの私が百八十七センチ以上ある彼に敵うわけがなかった。

「可愛い可愛い俺の奥さん、顔が鬼のようになっていきますよ?」

「誰のせいだと思ってるの! この変態!」

行儀が悪いけど、椅子の上が上がってやろうかっ！ この変態長身野郎に勝つためには、それしかないっ！

「こんなことをしては、雑煮が冷めてしまえますよ？」

ルームシューズを脱いだところで、瑛知さんがそう言っつて牽制してくる。

くっ……なんて、卑怯な……！ 冷めたらお餅が固くなっちゃうっ！ 温め直したら絶対に食感も味も落ちる！

ワナワナと震えながらルームシューズを履き直し、お雑煮にふたたび箸を付けた。

あとで絶対……絶対……つ対、消させる！

そう思っていたけれど、お雑煮のあまりの美味しさに、食べ終わる頃にはすっかり忘れてしまったのだった。



午後――

風邪を引かないようしっかりと厚着をして、車で神社へ向かった。コインパーキングに車を停めて降りると、冷たい風が頬に当たり、ゾクゾクと鳥肌が立つ。

「ううう……っ……今日は特に寒いねっ」

「ええ、本当に。あ、夏奈さん、俺側の手はポケットに入れないでください」

「ええ？ やだよ。寒いもん」

自分のコートのポケットへ手を入れようとすると、出して欲しいと言われた。転んだとき、手を使えないから、顔を打つかもしれないと心配してくれているのだろうか。

心配性だなあ。路面が凍っているわけじゃあるまいし、心配しなくても大丈夫なのに。

「ほら、夏奈さん」

「もーはいはい」

過保護だと思いつつも言う通りになると、出した手を握られた。

「あっ！」

心臓がドクンと大きく跳ね上がる。

「どうかしました？」

「う、ううん、別になんでもない。あは、あはは」

危ないからじゃなくて、手を繋ぎたかったらしい。さっきまで寒くて仕方がなかったのに、蒸気が出そうなほど、身体が熱くなった。

カイロを入れたポケットに手を入れるより、瑛知さんと手を繋いだ方が温かい。

そんな乙女チックなことを考えていると、瑛知さんがニヤリと笑って耳打ちしてくる。

「……怪しいですね？」

「な、ど、どこが？ 別にいつも通りだしっ」

「夏奈さん、もしかして……」

ギクツとして、顔が引きつる。

き、気付かれたら、からかわれるっ！

何も言えずに顔を引きつらせたままでいると、瑛知さんがつこりと微笑む。

「俺の股間でも握らされると期待してくださったんですか？ 申し訳ありませんが、さすがの俺も人の目があるところでは自重しようと思うのですが……夏奈さんがどうしても、と言うのなら善処します」

乙女チック気分、ぶち壊し……！

「お、思うわけあるかっ！ 人を痴女みたいに言わないでよっ！」

変態に痴女扱いされるなんてっ……。な、なんたる屈辱っ！

「てつきり俺は、夏奈さんの中で新たな扉が開いたのかと思って、期待に胸を膨らませていたのですが……」

「そ、そんなの開くわけないでしょーがっ！ 勝手に膨らませて、鳩胸にでもなっとなさいよ！」

言い合っているうちに、あつという間に神社に辿り着いた。

「わーっ……すごい混んでるね」

さすが元旦！ 境内は参拜客で溢れ、出店まで並んでいる。見ているだけで心が弾む。

「風邪やインフルエンザにかからないように、帰ったらうがい手洗いを徹底しなくてははいけませんね」

「ああ、流行ってるもんね。あ、そうだ。手と口を清めなきゃ」

鳥居をくぐり、身を清めるべく手水舎へ向かう。

「あれ、どつちから洗うんだっけ……」

出がけにネットで調べてきたのに、すっかり忘れてしまった。

「左手からですよ。右手にひしゃくを持って、まずは左手を洗います」

「あ、そっか。……ってあれ？ 瑛知さんも調べてきたの？」

「いえ、以前調べたことがあるんです」

「へえ、よく覚えてるね。私、出がけに調べてきたけど、すっかり忘れちゃったよ」

今、瑛知さんに教えてもらったのも、明日になったら、絶対忘れてる自信あり！

「記憶するのは得意なんです」

さすが瑛知さん！ 変態だけど、頭いい！ そういえば料理するときも、一切レシピ見てないな。記憶力がいいって便利！ すっごく羨ましい！

「ですから夏奈さんの喘ぎ声や身体の特徴なども、全てこの頭の中に記憶してま……」

「それは覚えてなくていい！ その心の穢れも、水で洗い流した方がいいんじゃないっ!?」

罵りながら左手を洗って、ひしゃくを持ち替えて右手も洗う。

「……石鹸をつけて、ゴッシゴッシと洗いたくなりますね」

瑛知さんは重度じゃないけれど、潔癖症だ。

不特定多数の人が使ったひしゃくで手を洗ったり、口をゆすいだりするのは、潔癖症の人からすれば辛い行為なのかもしれない。

「あー……つと、ごめん。私に付き合つて、無理しないでいいよ？」

「いえ、他人となら絶対に遠慮しますが、夏奈さんとの初の神社デートですから。しっかりとやりたいんです」

キュンとして思わずひしゃくを手から落としたら、瑛知さんがすかさずキャッチしてくれた。「それに是非とも叶えてもらいたい願ひ事がありますからね。神様の機嫌を損ねないようにしなければ」

神様の機嫌……!? 自分しか信じてなさそうな瑛知さんが、神様の機嫌を気にするなんてびっくり!

「どうしました? 見開いた目から、目玉が落つこちてしまひそうですよ?」

「いや、落ちないからつ! 瑛知さんが神様を信じてるなんて意外だと思つて、びつくりしたの」

「いえ、信じていませんよ。でも、『絶対いない』とも言えませんからね」

な、なるほど……それはそれで瑛知さんらしいかも。

「神様に、どんな願ひを叶えてもらいたいの?」

濡れた手をハンカチで拭い、ちよつとドキドキしながら尋ねる。

百年以上の歴史がある製薬会社の社長で、変態だけど超絶素晴らしいスペックを持ったイケメン! そんな瑛知さんなら、大抵の願ひは簡単に叶うだろう。そんな人が神様に頼つてまでも叶えたい願ひ事つて、一体なんだろう。

「知りたいですか?」

「うん、知りたい!」

もつと料理が上手になりますように! とか? いや、でももう上手だしなあ。瑛知さんの夢だった宝条グループの社長になるつていうのももう叶つたわけだし……うーん、全然想像できない。「そうですか。夏奈さんはそんなに俺の秘密を知りたいのですか。俺の最も秘めたる場所を覗きみたいと、そう望んでくださつてゐるわけですね?」

「ちよつ……へ、変な言い方しないでよつ!」

周りの人に聞こえたら、私、変態みたいじゃないつ!

「夏奈さんが仰つたことをそのまま繰り返しただけです?」

こ、こんの野郎つ! 余計変態に聞こえるでしょーがつ! ああつ! 隣にいるおばあちゃんがこつち見てるよつ……! 会話聞こえた!? ち、違ふんです! 私じゃなくて隣で涼しい顔して手を洗つてる、一見好青年に見えるこの男が変態なんです!

「そ、それよりも、どんな願ひ事なの?」

「それはまだ、内緒です」

「ここまで恥かかせておいて、内緒おつ!」

「ええ、まだ内緒ですよ。さあ、参拜の列に並びましょう」

『まだ』つてことは、いつかは教えてくれるのだろうか。

いや、ここまで恥ずかしい思いをさせられたのだから、意地でも教えてもらおう。

手を繋ぎ直して、長い長い列に並ぶ。かなり待つことを覚悟したけれど、瑛知さんと話しながら

待っていたから、待ち時間も退屈しなかった。

お賽銭は五百円以内までしか入れたことがないけれど、今年は奮発して千円を入れる。私、すごい奮発した！と高揚している私の隣で、瑛知さんは一万円札を出したかと思うと、全く躊躇わずに賽銭箱に入れた。

「ひえ!？」

い、い、い、一万円——!？」

さすが宝条グループの社長！ 一万円は小銭感覚なの!? 福沢諭吉もびつくりだよ!

「夏奈さん、どうしました?」

「や、お、お賽銭箱に一万円入れたから、びつくりしちゃって。毎年そうなの?」

「いえ、毎年は来ていませんが、大体は千円程度ですね」

「ああ、なんだ。そうだったんだ」

千円でも私にとつては奮発価格だよ!

それにしても一万円を入れてまで叶えたい願い事って、一体なんだろう……

ネットで見た参拝の作法を思い出して、二回礼をしたあと、二回手を叩き、一礼して願い事をする。ちよつと乙女チックな願い事かもしれないけど、これからはずとずとずと、瑛知さんと一緒に居られますように……つと。

「今年は夏奈さんの新たな扉が開きますように……」

そう、今年は新たな扉を……つて……

「何言ってるの!? あんた!」

「願い事です」

「まあ、まさかそれが是非とも叶えたい願い事……つ!?」

「ええ、その願いを叶えて頂けるなら、金に糸目はつけませんね」

「ば、ば、ば、馬鹿じゃないの——!？」

他の参拝客の視線を思いっきり集めたけれど、ツッコまずにはいられなかった。

ああ……神様……

この男の煩惱は百八つどころじゃないようなので、昨日の除夜の鐘では足りなかったようです……

「ああ、願い事はそれだけではありませんよ? えー……あー……、ああ、そうです。結婚式が成功するようにとも祈りましたよ?」

「……今思い出したように言われても、ちよつとも信用できないんだけど?」

「ああ、バれてしまいましたか。ええ、祈ってません。俺は完璧主義なので、結婚式は神頼みしなくとも絶対に成功させます」

少しぐらい嘘を吐き通そうとする努力をせんかい!

「あのさー、ドレスのことなんだけど……何もそこまでこだわることなくない? 着るの、私だよ? モデルさんみたいな人が着るんだつたらわかるけどさー……」

初めは籍を入れるだけで終わらすつもりだったのだけど、やっぱり結婚式をしたいという瑛知さ

んの希望で、私たちは今秋結婚式を行う予定なのだ。

——そこまではいい。結婚式をしたいと言ってくれたのは、ちょっと照れくさいけれど正直嬉しい。……でもこの変態は、こんな平々凡々の私にオーダードレスを作るつもりなのだ。

しかもこだわりまくった物を作るつもりでいるらしく、瑛知さんが集めてきた大量のドレスカタログや結婚情報誌には、ドン引きするほどびっしりとメモ付きの付箋が付いている。

「何を言っているんですか夏奈さん。モデルなんかと比べないでください。夏奈さんはモデルよりも美しくて、綺麗で、可憐ですよ」

「……メガネ、曇ってんじゃない？ 拭いた方がいいよ」

恋というフィルターがあるせいかな、この男にはこんな平々凡々の私すごい物体に見えているようだ。

恋ってすごい……



参拝を終えた私たちは、出店を回っていた。

「瑛知さん、無理しなくていいよ？」

潔癖症の瑛知さんには、出店の食べ物はキツいだろうと思っていただけで、彼は拒否する様子は見せず、私とたこ焼きをシェアし、今はジャンボランクソーセージを食べている。私はケ

チャップ&マスタードで、瑛知さんはシンプルに塩コショウだ。

「いえ、別に無理していません。俺も夏奈さんと同じことがしたいので」

「そう？ それならいいけど……」

瑛知さんが一生懸命私に合わせてくれようとしているのがわかって、嬉しい。

今までお祭りや初詣のときに何度も出店で食べ物を買ってきたけれど、今年食べているものが今まで一番美味しく感じる。

「塩コショウ、美味しい？」

「ええ、食べてみますか？」

「いいの？ ありがとう。私のも食べる？」

「頂きます。巷で見かけるような人目を気にしない馬鹿なカップルのように、食べさせて頂けませんか？」

馬鹿なカップルって……

「や、やだよ。恥ずかしいし！」

と言いながらも、持ち手が短くて持ちづらかったので、仕方なくバカップルっぽく食べ合う。すると瑛知さんがニヤリと笑った。

なんだか、嫌な予感がするんですけど……

「塩コショウも美味しいね。ありがとう」

「そうですか。よかったです。夏奈さんが食べさせてくださったケチャップも美味しかったです

すよ

「そ、そう……。で、何笑ってるの？　なんか楽しいことでもあった？　それともやけちゃうほど美味しかった？」

嫌な予感しかなかったけど、一応聞いてみた。

「ええ、夏奈さんが長い棒状のものを食べていると、卑猥な妄想ができてとても楽しいなあと思いまして」

聞かなきゃよかったー……！

「夏奈さんから長い棒状のものを食べさせて頂く……というのも、またなんだか新たな扉が開けそうですね」

「あ、あ、あんたの頭の中は、一体煩惱がいくつあるわけっ!?」

「どうでしょう。見当もつきません」

瑛知さんはニッコリと微笑み、少々誇らしげに答えた。

「もう一回手水舎で手を……いや、全身洗ってきてくれる?」

「そんなもので、俺の穢れが落ちると思いますか?」

お、思わない……！　頑固なカビ汚れよりもしつこそう！

味わいたかったからゆつくり食べていたけど、わざとムツシャムツシャとあつという間に食べ終えてやる。

ピンク色な妄想から、真つ赤な想像をして戦慄しろ！

「……なるほど、歯でガブガブ噛まれるのも、また……」

瑛知さんは自分の顎に手を当てて、感心したようにうんうん頷く。

なるほどじゃないっ！　この男は私の想像をどこまで斜め上に突き抜けていけば気が済むの!?

「あ、夏奈さん。あちらにチョコバナナがあります。それからりんご飴も買しましょう」

「ちよっ……棒が付いているものばかり選んでない!?　というか確実に選んでるでしょっ!」

瑛知さんは少しも恥ずかしがる様子を見せず、とても爽やかな笑顔で「もちろんじゃないですか」と答えてチョコバナナを買いに行った。

「さあ、どうぞ」

「……いつ、いらない」

本当は食べたいけど、卑猥な妄想をされてはかなわない。

「俺は食べたくありませんし、このままだとゴミ箱行きですね」

「えっ！　何も捨てなくても……!」

「ああ、もつたいない。夏奈さんに食べて頂くとした俺の気持ち、バナナの生産者や日本に来るまでに携わった業者の苦勞、そしてチョコバナナを作った方の思いは、全てこのバナナと共にゴミ箱へ捨てられてしまうわけ……!」

な、なんて卑怯な……!!

「わ、わかったよ！　食べるっ！　食べればいいんでしょっ!?!　ドウモアリガトウゴザイマスー!　私バナナ、大好きですからっ!」

「バナナ、大好き。……最高の言葉ですわね」

「ななっ……なんでもかんでも下ネタに持つていくのやめてよねーっ！」

「さあ、どうぞ。いやらしくどうぞ」

「こ、こっち見ないでよっ！ 馬鹿っ！」

ああ、いまだかつてチョコバナナを食べるときに、いやらしい食べ方にならないようにしないと、なんて注意したことがあっただろうか……。いや、絶対ない！

「ねねねね！ 見て見てっ！ あの人だよ！ さっきチョコバナナ買ったイケメン！」

「わ、ホントだ！ ぶっちゃけ、そんなに騒いで大げさーっと思ってたけど、ホントにイケメンじゃん！ 女の方が持つてるっことは、彼女に買ってあげたんだ？ やっさしー！」

「うちのダアなんて、絶対そんなことしてくれないよおっ！ あーあ、羨ましいっつ」

若い女の子たちが、瑛知さんを見てキヤアキヤア騒いでいる。黙っていれば完璧なイケメンだもんな。……中身はただの変態だけだ。

瑛知さんは騒がれているのに気付いているのか、興味がないのか、ひたすら私がチョコバナナを食べている姿を見ている。

「み、見ないれっつて言ってるでふおっ!？」

「ああ、そうだ。スマホで写真を……いや、動画で撮……」

「らんでいい！ 撮ったら張っ倒すからねっ！」

優しくない！ 優しくない！ これは変態プレイを強要されてるんだからーっ！

とは言えず、ムッシュヤムツシャとチョコバナナを平らげ、私は瑛知さんが買ってきた棒状のものを次々と食べることになるのだった。



初詣を堪能した私たちは、コインパーキングに停めた車に向かっていた。

ん………？

ねちっこい視線を感じて横を向くと、瑛知さんがなぜか私をジッと見つめている。

「何？ もしかして口にチョココ付いてる？」

気を付けて食べてたつもりだったけれど、付いちゃってるかも。

「いえ、付いていませんよ。付いていたとしたら、俺がそのチャンスを逃すと思いますか？ 絶対に逃しませんよ。すかさず舐めとります」

「き、気持ち悪いこと言わないでよっ！ ……じゃ、じゃあ、何？ 何見てんの？」

服に何か付いているとか？ ストッキングが伝線してるとか？

「服を着ているので誤差はあるかもしれませんが……」

「こ、誤差？ え？ 何？」

「ウェストプラス二センチ。太腿とふくらはぎもわずかですが太くなりましたね」

「えっ………!？」

た、体形を見てたの!?

思わずどこかに身を隠したくなったけれど、瑛知さんは繋いだ手を離してくれない。

「間違いありません。夏奈さん、正月休み前に比べて少々ふつくらしかったですね」

満面の笑みでズバリと言いついでられ、表情が強張る。

「や、やっぱり? 自分でもちよっと食べ過ぎたな〜とか、実はウエストがきついな〜……とか思ってたんだけど……」はため「傍目から見てもそう思う?」

見た目に出てるって、私……相当やばいんじゃない?!

「いえ、常人ならわからないと思いますよ。ヒップは……ああ、こちらはプラス一センチですね」

「ちよ、ちよっと! 観察しないでよっ!」

「あ、良かったですね。バストはプラス三センチですよ。……と言っても、こっちは正月休み以前に大きくなったようですが」

確かに正月休み前、新しいブラを買いに行つたときに測つてもらつたら、プラス三センチだった。えっ……てつきりであらめな数字を言っているんだと思つたけど、実は正確!?

へ、変態の目、恐るべし……!!

「まあ、こちらは太つたからじゃなくて、俺が丹精込めて育てたからだと思えますけど」

「た、丹精込めてつて、変な言い方しないでよっ!」

「よく育ててくれてるようで嬉しいですよ」

瑛知さんはニヤリと笑い、私の胸をまじまじと眺め出す。コートを着ているのに、変態の目には

透けて見えているように感じてしまう。

「見ないでよっ! 馬鹿! ド変態っ! 無限大の煩惱の塊っ!」

「これからも手塩にかけて、無限大の煩惱を肥料にして育てて差し上げますから、楽しみにしてくださいね」

「このド変態! どこに話しかけてんのっ! 手塩にかけなくていいからっ! 肥料もいらさないからっ!」

車の中は温かくて、ホツとため息がこぼれた。いつの間にかエンジンスターターで暖房を付けていてくれたらしい。

「あー温かあ……んんっ!?!」

「どうかしましたか?」

スマホがぶるぶる震えたのに気付いて確かめると、妹の結奈からメールを受信したところだった。『お姉ちゃんあけましておめでとう。今年もよろしくねっ! 今年はお姉ちゃんとお正月を過ごせなくて寂しいよお〜! ハワイの海、すっごく綺麗だよ! 今度はお姉ちゃんとお義兄さんも一緒に行くからねっ! そういえば二人は新婚旅行へは行かないの?』

メールと共に画像が添付されていて、そこにはエメラルドグリーン色をした綺麗なハワイの海が写っていた。

そういえば新婚旅行なんて、全然頭になかったなあ……

結婚当時は瑛知さんのことが大っ嫌いだっつし、瑛知さんと両想いになったことがわかってから

は、結婚式の準備に夢中だったし。

行きたいかと聞かれれば行きたいって答えるけれど、瑛知さんは社長業を継いだばかりでたださえ忙しいから、今はきつと無理だ。

でも、いつかは行けたらいいなと思いつながら画像を全画面表示にして、瑛知さんの方へ向ける。

「結奈からのメールだったよ。ほら、ハワイの海」

「ハワイに行っているんですか？」

あ、そういえば『挨拶はいらない』としか言わなかったから、旅行に行ってるの知らなかったんだっけ。

「そう、家族全員でね。今年はハワイで年末年始を過ごしてるんだよー」

「旅行……ああ、だから挨拶はいらないって言っていたんですね。その画像、よく見せて頂けますか？」

「うん、いいよ。はい」

もしかして瑛知さん、海が好きなのかな？

やたらと真剣な顔をしているけど、どうしたんだろう。

「この辺り……いえ、こちらの方がいいでしょうか」

「え、何？ こちらって？」

「いえ、今脳内で夏奈さんの水着姿を合成中してしまして……」

瑛知さんは顎に手を当て、ふむふむと頷く。

水着!? 合成!?

「ふむ、美しいですね。ワンピース型……いや、やはりビキニ……裸……。ふむ、素晴らしい……」

「いや、いやいやいやいや！ 全部通しておかしいけど、最後が特におかしいでしょっ！ 水着！

水着を着せてよ！ こんな綺麗な海の前に真っ裸でいたらただの変質者じゃない！」

全く、この男はどこまで突き進めば気が済むんだか……

「夏奈さん、お願いがあります」

「断る。絶対に嫌っ！」

「……まだ、何も言っていないのですが」

「聞かなくてもわかるしっ！ どうせ変態的なお願いでしょ？ 絶対嫌っ！」

シートベルトを締めながら極力瑛知さんから距離を取り、威嚇するようにじとりと睨む。

「期待を裏切って申し訳ございませんが、今日だけは違いますよ。俺のお願い事は、近日中に新婚旅行へ行きましょう。……ということでした」

「えっ!? し、新婚旅行っ!？」

「俺としたことが結婚式の準備に気を取られて、新婚旅行を忘れていたとは……。一生の不覚です。画像を見せてもらってよかったです。見せてもらっていなかったら、気付けないままでした」

瑛知さんも私と同じタイミングで思い出したらしい。

夫婦って長く一緒にいると似てくるっていうけど、私たちも少し似てきたのかな。……って、いや、似ちゃダメだ！ 私までド変態になっちゃっ！

「近日常じゃないとダメなの？ 私はもう少し先でもいいかなって思うんだけど……」

「ダメです。早く行かないと『新婚』じゃなくなりますから、新婚旅行じゃなくて、夫婦旅行になっちゃダメですよ」

「ああ、確かに……って、そここだわるんだ？」

「もちろんです。夏奈さんと過ごすイベントは、一つも取りこぼしたくありませんから」

「瑛知さん、なんか可愛い……。それに比べて私は……」

『近日常じゃないとダメなの？ 私はもう少し先でもいいかなって思うんだけど……』

……って、可愛いじゃない！ なんか仕事に疲れて、日曜日も家でゴロゴロしてるおっさんみたいっ！ 好きな人が旅行に行こうって言うてくれるんだから、もっとこう、可愛い反応っていうものがあるでしょ!?

ああ、なけなしの女子力がさらに下がってきている気がする。

「夏奈さんは、どこへ行きたいですか？」

「うーん……せっかくの新婚旅行だし、海外に行きたいなーって思う反面、ちよつと昭和チックに、国内で温泉旅行っていうのも憧れるんだよね。近日常なら、瑛知さんは長期休暇を取るの難しいだろうし……そういう面を考えると、やっぱり後者かな」

「なるほど、温泉ですか」

でも潔癖症の人にとって、温泉ってどうなんだろう？

不特定多数の人が入っている一つのお風呂を目的に旅行に行くのって、気が進まないんじゃない

かな。ちよつと残念だけど、瑛知さんが無理しなくちゃいけないところは行きたくない。せっかくなら二人とも楽しめるどころじゃなくちゃ！

「あ、でも無理に温泉じゃなくても……」

「いいですね。確かに長期は難しいですし、温泉に行きましょう」

えっ！ いいの!?

「楽しみです。どちらの温泉に行きましょうか」

意外なほどに乗り気で、拍子抜けする。

「自分で言うておいてなんだけど、大丈夫？ 温泉だよ？ いろんな人が入ったお風呂に入るんだよ？ 瑛知さんが完璧に磨き上げた自宅の浴槽じゃないんだよ？」

「ええ、少々抵抗があるのは事実ですが、それを上回る魅力がありますから問題ありません」

「魅力？」

温泉の効能？ 旅館の雰囲気？

「はい、夏奈さんの浴衣姿です」

瑛知さんは、すかさずそう答える。しかも、大真面目な顔で。

「……は？」

聞き間違いかと思っただけ、瑛知さんは頼んでもいないのにもう一度『夏奈さんの浴衣姿が見たいから、温泉がいい』と言った。

「夏奈さんの可愛い浴衣姿、楽しみですね。ああ、そうだ。これを機にカメラを最新型に買い替え

ましよう。最近のスマホの画質はあなだけれませんが、やはりカメラが一番で……」

「や、やめてっ！ お願いだから本当にやめてっ！ ハードル上げないでっ！」

超絶可愛い子ならまだしも、平々凡々の私が浴衣を着たところでなんてことない。温泉の効能を借りても無駄だ。

前々から思ってたけど、瑛知さん、両想いになってから視力悪くなってるじゃない？

「……瑛知さん、メガネの度数絶対合ってるじゃないと思うよ？ 早く調整しに行った方がいいんじゃない？」

「いえ、最近合わせてきましたから、バッチリですよ」

バ、バッチリなんだ……

「今日は旅行代理店を回って、パンフレットを集めて帰りましょうか」

「お正月なのにやってるのかな？」

「ええ、おそらくは。最悪やっていなくても、店の外には自由に取れるパンフレット置き場があるはずなので」

「あ、そっか」

瑛知さんはカーナビで旅行代理店を検索し、車を走らせる。運転する姿を見ると、頬がポワポワ熱くなってきた。

改めて見ると、瑛知さんって本当にカッコいい……

変なの。こんなカッコいい人が、平々凡々な私を可愛いと思うなんて……

整った横顔、ハンドルを握るゴツゴツした男性らしい手、アクセルを踏む長い足――

それにしても、まさか男嫌いの私が結婚……。しかもこんなイケメンと結婚することになるなんて、夢にも思わなかったなあ。

昔の私が今の私を見たら、卒倒するに違いない。

「温泉、楽しみですね」

「うん、楽しみだね」

「浴衣プレイ、楽しみですね」

「うん、楽し……んあっ!？」

そ、それに、まさかこんなイケメンが変態だなんて……別の意味でも、卒倒するに違いない。



旅行代理店を回ってパンフレットを集め終わったあと、せっかくだからドライブデートをしようということになり、瑛知さんは車内から夜景が見られる場所に連れてきてくれた。

「わわわわ、綺麗……!」

海の近くの高台にある、なんの変哲もない駐車場。だけど、そこからは夜の海と夜景と星空が一望できた。寒くて空気が澄んでいるからか、いつもより星が綺麗に見える。

「気に入って頂けてよかったです」

感動する私を見て、瑛知さんは満足そうに微笑む。

「よくこんな所、知ってたね……。……あっ！」

そうだよ。私と違って、瑛知さんは過去に何人も付き合った人がいるわけだし、こういう女性が喜びそうなロマンチックな場所を知っていてもおかしくないよね。

「や、やっぱり、なんでもない」

ちよつとだけ面白くなくて、胸の中がムカムカする。自分の心の狭さに呆れていると、瑛知さんはクスクス笑い出し、嬉しそうにしている。

「もしかして、俺が以前付き合っていた女性と来た場所に連れてきたと思っっていますか？」

な、なんでわかるの……っ!? エスパー!?

「や、別に私は……」

誤魔化したところで、瑛知さんには全てお見通しだ。バレてしまったのなら、仕方がない。気になるし、聞いてしまおう。

「……うん、思った。そうなの？」

「違いますよ。そもそもデートなんて面倒で、ほとんどしたことがありませんから。この場所は秘書の田端くんから教えて頂いたんです。穴場らしいですよ」

「あ、そうだったんだ」

デートは面倒なのに、私とはしてくれるんだ……

「田端くんは女性の趣味は少々特殊なのですが、こういった女性の喜びそうな場所や店をよく知っ

ているので感心させられます」

「と、特殊って……」

瑛知さんも人のこと言えないと思うけど？

ああ、胸の中が温かくなって、□元が緩むのを抑えられない。顔を見られたくなくてプイッと横を向く。

「夏奈さん」

名前を呼ばれて、そおつと元の位置に顔を戻すと、長い指先で頬をプニッと突かれた。

ああ、このやり取り……完全にバカップルだよ。でも、嬉しい……

「さっきのは、嫉妬してくださいさっさと思っくいんですか？」

「う……。それは……」

「それは……なんですか？」

誤魔化したって、瑛知さんの前では無駄だ。

「し、してるかしてないかで言ったら……どっちかって言うと……し、した？ かも、しれないけど……。で、でもっ……それは、人間として自然な感情、っていうか……その……」

は、は、恥ずかしい——っ……!

真冬だっというのに、窓を開けたくなるほど顔が熱くて堪らない。

「そうですか。夏奈さんが嫉妬を……。そうですか、嫉妬を……なるほど」

「な、何回も言わないでよっ！ ……んっ」

いつの間にかシートベルトを外していた瑛知さんが、助手席に座っている私に覆いかぶさり、唇を奪ってきた。

「ん……………んん……………」

柔らかい唇を押し付けられて、気持ちよさのあまり産毛が逆立つていく。自然と緩んだ唇の間から瑛知さんの長い舌が入り込んできて、それを待ち望んでいた私の舌と絡んだ。

「ん……………んん……………は……………んん……………」

エンジンを消した静かな車内に、舌で唾液を掻き混ぜるいやらしい音と荒い息の音、そして私が時折漏らしてしまう恥ずかしい声が響いた。

コートのボタンを外され、ドキッとする。

え、え、ま、まさか……………」

ニットカットソーの中に大きな手が潜り込んでくるのがわかって、慌てて瑛知さんの手を掴んだ。

「あつ……………え、瑛知……………さん？　ちよつと、待って……………こ、ここ……………車の中……………」

「ええ、そうですね」

手がどんどん潜り込んできて、ブラのアンダーに指先が当たる。

「そうですね、じゃないですよ……………っ！　車の中は……………ダメ……………だつて……………ば……………っ！」

瑛知さんは濡れた自らの唇をペロリと舐め、満面の笑みを浮かべた。夜景の淡い光に反射して、濡れた唇が艶やかに光っている。

ああ、なんだか妙に色っぽい。ドキドキして、心臓が苦しい……………」

直視できなくて目を逸らすと、大きな手がブラの上から私の胸を包み込む。

「やっぱり大きくなりましたね？」

「う、うるさ……………っ……………あ……………」

カットソーが瑛知さんの手の形に盛り上がっているのに気付いて、顔が燃え上がりそうなほど熱くなる。

「あつ……………ちよ、ちよつと、こら……………っ……………あつ……………」

ムニムムニ揉まれるたび、心臓の音が速くなっていく。

「も……………っ……………瑛知さん……………っ！　ダメだつてば……………ひゃっ……………」

長い指先がブラのカップの中に入り込んできて、尖り始めていた胸の先端をツンと突いた。

「もう乳首を立たせている感じやすい夏奈さん、どうしてダメなんですか？」

「い、言わないですよ！　馬鹿……………っ！……………場所的にアウトでしょっ!？」

穴場というだけあって周りに人はいないみたいだけど、外なんだからいつ人が来てもおかしくない。このまま身を委ねたくなる気持ちをなんとか堪え、押し掛かってくる瑛知さんの身体をググッと押し返す。

くううー……………！　ビクともしない！

「アウトだからこそ、楽しいんじゃないですか。スリルがあつて、いつも以上に興奮しますね」

「へ、変態基準で考えないですよ……………常識人からしたら、全く楽しくな……………あつ……………こ、こ

ら……っ……あっ……ん……うっ……!」

「そうですか？ 常識人であるらしい夏奈さんの乳首は、こーんなに楽しんでくださっているようですが、気のせいでしょうか？」

指の腹で胸の先端をクリクリと転がされ、ますます尖っってしまう。

「こ、れ……は、あんたが弄った……からっ……ん……う……だ、だめっ……だってば……!」

「転がすのが駄目なら、舐めるのはどうですか？」

「も、もっどダメに決まって……っ……るでしょお……っ!?」

お腹の奥が甘く疼きだして、膝と膝を擦り合わせると下着の中が潤んでいるのに気付いた。

「こ、ら……っ……も……ホントに……ダメだったら……っ!」

ま、まずい、まずい、まずい……っ!

濡れていることがバレたら、変態心にますます火をつけてしまうこと間違いなしだ。ジタバタしても瑛知さんはちっとも身体を退けてくれないし、締めたままだったシートベルトに拘束されて全く逃げられそうにない。

「屋台であんな卑猥な棒状のものばかり食べて、俺を誘った夏奈さんがいけないですよ？ 身体で責任を取ってください!」

「ひ、人聞きの悪いこと言わないでよねっ! 確かにジャ、ジャンボフランクフルトは私が食べたって言ったけど、その他は瑛知さんが無理矢理食べさせたんでしょっ!」

「ジャンボフランクフルトなんて卑猥な言葉を夏奈さんから聞けるなんて……やはり誘っている

じゃないですか。もう完全に止まりません!」

「ど、どこが卑猥な言葉かつ! この変態っ! ……あっ! ちよ、ちよっど、そ、そっちは本当にダメ……っ!」

胸の先端を弄り回している手はそのまま、空いている方の手がスカートの中に潜り込んできた。付け根に向かってくるのがわかって、膝にギュッと力を入れて瑛知さんの手を挟み込み、それ以上進めないよう阻止する。けれど、乳首を摘ままれ、たちまち力が抜けてしまう。

「ふ、あ……っ……」

防衛も空しく、瑛知さんの手が恥ずかしい場所へ到達した。ストッキング越しに割れ目を擦られると、くちゅくちゅという音が聞こえてくる。

「あっ……」

濡れているとは思っていたけれど、音が立つほど濡れているとは思わなかった。

は、恥ずかしい……っ!

「棒状の物ばかり食べさせる変態に感じて、下着とストッキングを通り越すほど濡らしてしまっているのは、どなたでしょう?」

「そ、それは……瑛知さんが……ダメだっって言ってるのに、しつこく触る……から……で……ひゃう……っ!」

瑛知さんの指が、ストッキング越しに敏感な粒を爪でカリカリと引っ搔く。

「夏奈さんのお気に入りの場所……ストッキングと下着越しでも膨れてるのがわかりますね？ た

割れ目の中に潜り込んだ指が、ヌルヌルに濡れた敏感な粒を撫で転がす。

「ヌルヌルで、ツルツルで、愛でたくなります。よしよし」

「め、愛でないでっ……あっ……はうっ……ん……！」

「撫でると素直に悦ぶところが、ますます愛しくなりますね。よしよし」

「こ、こらああっ……！」

指が動くたびに甘い電流が流れ、感電したみたいに身体が跳ね上がる。

「ひう……っ……あっ……ああ……っ……は、うっ……」

「あまり声を出すと、誰かが近寄ってきたときに聞こえてしまうかもしれませんね？」

意地悪なことを囁かれ、顔がカアツと熱くなる。

「……っ……！　だ、だからここじやイヤだって言っただじゃない……っ……！　馬鹿っ！　変

態っ！　ド変態……あ……っ!?」

疼いていた中に指を入れられ、全身の産毛がプワリと逆立つ。

「……っ……っふ、ああん……っ」

「ド変態の俺に指を入れられて、常識人の夏奈さんの中は、すごく悦んで頂いているみたいですよ？　ギユウギユウ締め付けてきますよ？」

「い、言わないで……馬鹿……っ……」

弱い場所を押し潰され、ヌルヌルの液体がどんどん溢れてくる。

こんなところでもないところを誰かに見られたら、通報ものだよっ……！

擦り切れそうになっている理性が警報を鳴らしているけれど、瑛知さんに触れてもらいやすいようにと、足が自然と開いてしまう。

ああ、変態菌に侵されて、私までド変態になっちゃってる……！

「俺が触りやすいように自ら広げてくださっただんですか？　ありがとうございます」

「ち、が……っ……ふあ……」

親指で敏感な粒をくりくりと転がされる。中と外側を一度に弄られると、頭が真っ白になりそうだ。瑛知さんの長い指でも届かない場所がムズムズ疼いて、喘ぎと一緒に切ないため息がこぼれた。

「夏奈さんの中、物欲しそうに動いてますね？」

「……そ、そういうこと、言わないで……っ……馬鹿……っ」

刺激にふるふる震えながら抗議したら、埋められていた指を引き抜かれる。

「ん……っ……きや……っ!?」

突然の喪失感に身悶えしていると、背もたれを倒され、私はシートベルトをしたまま、瑛知さんに組み敷かれた。

「エンジンンを切っただいぶ経ちますが、寒くありませんか？」

「……べ、別……に……」

むしろ湯気が出そうなほど身体が熱い。

「そうですか。俺はちよっと寒くなってきました。なので、夏奈さんから暖をとらせて頂きますね？」

「う、嘘ばっかりっ……！ 瑛知さんの手……すっごく熱いじゃないっ……！」

「ああ、バレましたか。まあ、暖を頂くのをやめるつもりはありませんが」

「開き直らないでよっ！ あっ……ちょ、ちょっと……も……っ……っ……」

瑛知さんがストッキングとショーツを下げようとしているのがわかって、無意識に腰を浮かせて下げやすいようにしてしまふ。

「最後までしても、いいですか？」

「……きよ、拒否しても、する気満々のくせに」

「さすが夏奈さん、ご名答です」

当たっても嬉しくないっ！

瑛知さんはズボンのポケットからコンドームを取り出すと、歯と片手でペリッとパッケージを開く。

「……ちょっと待って、そっ、それ……どうして……っ」

「あ、生でいいですか？ 俺としては当分避妊を続けたかったのですが……」

「ち、違う、違うっ！ そうじゃなくて、どうしてそんなもの、ポケットに入れてるのっ!？」

ま、ま、まさか、最初からこれが狙いで用意してきた!？」

「さあ、どうしてでしょう？ 当てたら、豪華賞品をプレゼントしますよ」

豪華賞品……絶対ろくでもない物だと、快感に痺れた頭でも瞬時に悟ることができた。ろくでもない物というか、絶対下ネタ系でしょ！ 間違いないよ！ 自信あるっ！

「……瑛知さん、最初から、く、車でする気満々だったでしょっ……ひあっ」

準備の整った硬いモノを宛がわれ、これから与えられる刺激を想像して、身体がブルッと震えた。「大正解です。では、見事正解したラッキーな夏奈さんに、豪華賞品を贈らせてください。……と言っても、俺が頂く形になってしまふのでしょうか？」

ズブッと奥まで満たされ、背中が弓のようにしなる。

や、やつぱり、下ネタ系……っ！

「ん……うっ……う、ラッキーどころか、アンラッキーじゃないっ……っ……！」

ムズムズしていた場所に瑛知さんのものが当たって、背筋に甘い痺れが走る。そこをたくさん擦って欲しくて、腰が自然と揺れてしまふ。

「ああ、ラッキーなのは俺ですね。新年早々、夏奈さんとこんな刺激的な場所で楽しめるんですから」

瑛知さんは満足そうに微笑むと、腰を動かし始める。

「……っ……あ……っ……あ……っ……は……っ……ん……あ……っ……」

突かれるたびに頭の中に火花が散って、憎まれ口が何も思い浮かんでこない。

「こんなに濡れていては、車のシートにまで滲みているかもしれませんね。素敵な記念の証になりそうです」

「……っ……やあ……」

瑛知さんが腰を振るたびに車がギシギシと音を立てる。と同時に、中を掻き混ぜられるいやらし

い音が響く。

「夏奈さんの中……は、いつも処女の時きみたいに……きつくて、気持ちいい……ですね……」

「ふ、あ……っ……へっ……変態っばいこと……言わないで……よおっ……っ！」

「ええ、俺は変態ですからね」

「開き直らないですよ……！ 馬鹿っ！ 馬鹿変態っ！」

きついか、きつくないとか瑛知さんとか経験がないからよくわからないけど、彼がそう感じるのは私の中が狭いからではなくて、瑛知さんが大きすぎるせいじゃないだろうか。

や、瑛知さんのしか見たことないから、わかんないけど……っ！ わ、わかんない……けど、うう、気持ちよすぎて何も考えられない……！！

ニットカットソーをめくりあげられ、素肌が冷たい空気に晒されて肌が粟立つ。

「あっ……！！ ダメッ……！！ 外から見えちゃ……きゃっ……っ！！」

ブラのカップを下にずり落とされ、胸がブルリとこぼれた。

シートベルトが胸に食い込んで、普通に脱がされるよりもなんだか卑猥な気がするのは、私が変態菌に侵されているせいだろうか。

「大丈夫……ですよ。見えないように……ほら、こうして隠してあげます」

「か、隠すって……？ えっ……ひゃうっ……っ!?」

右胸の先端をパクリと啜えられ、左胸は大きな手の平で形が変わるほど揉みしだかれた。啜えられた先端をねっとり舐め転がされると、お腹の奥が甘く痺れる。

「あんっ……っ……そ、そんな隠し方……しないです……ん……あっ……は……んうっ……あっ……あっ……っ……」

「外に聞こえてしまいますよ？」

声を抑えたいのに、突かれるたびに自然と出してしまう。

「そ、そんな……と、言われてもっ……ん……あっ……っ……」

瑛知さんはクスツと笑い、さらに激しく突き上げてくる。

「あ……っ……や……、だ……瑛知さん……の馬鹿あっ……っ……！ あっ……ん……っ……っ……あっ……あ……っ……っ……っ……」

「家でするより……も……声……が……大きいです……ね」

「う、ううう……うるさい……っ……ばかっ……ば、か……っ……変態いいいっ……っ……っ……」

硬い胸板を叩いても、瑛知さんはちっともダメージを受けていないらしく、むしろ楽しそうにしている。

やがて足先から快感がせり上がってきて、真っ白な世界に包み込まれた。

「……あ、あああっ！」

中が勝手に収縮を繰り返して、入っている瑛知さんのモノをギュウギュウに締め付ける。するとほぼ同時に瑛知さんも絶頂に上り詰めたようだった。

二人の激しい呼吸の音だけが、車内に響く。車の香水の匂いに混じって、男と女の淫靡な匂いが漂っていた。